

## チリ地震津波の体験談

1960年5月22日、チリ南部でマグニチュード9.5という観測史上最大の超巨大地震が発生し、これにより生じた大きな津波が平均時速750kmという高速で1万7千km離れた日本に同年5月24日午前4時過ぎに到達し、甚大な津波被害をもたらしました。これは、その大災害で被害をうけた岩手県大槌町での体験談の紹介です。

### 体験談その1 中学校校長（被災時）

5月24日朝、夜がようやく明けた頃津波のおそれがあるということが判りました。「海の水が狂っている」「大潮だろう。地震がないから津波が来る筈がない。」などの話のうちに、「潮がぐんと引いて海岸の水が沖の方まで底が見えたから必ず来る。」などの情報があつて警鐘やサイレンが鳴り、漁業組合の拡声機で次々と報道されましたので、それまでに生徒たちも安全地帯に避難したようです。

学校の職員は8名で学区内居住者3名は津波襲来の報とともに学校に馳せつけましたが、通勤していた教員5名中1名は被害を受け、他の教員は列車の不通や電話不通により学校との連絡がつかね、吉里吉里、浪板部落の様子がわからなまま徒歩で馳せつけました。

吉里吉里の被害は堤防外や築港方面で稍筵被害が大きいですが、その他は被害は少ないので生徒の大部分は登校して来ましたので、直ちに状況調査をしたところ、生徒の中には流失家屋とか人に痛み等はなく、家屋の床上浸水程度であることをつかみ、学校長を先頭にして男子生徒は全員で、被害地の跡片付に出ました。場所は須賀前より堤防に沿って築港方面と大ばく側、それに被害生徒の家の手伝いに手分けしました。堤防外には納屋が押しつぶされたり薪が散乱していたり、漁具や家具などが押し流されていました。

生徒職員が一体となって倒れた納屋（水産加工場）の屋根をはがして、中から筵や萱簀などを出して堤防に拵げて乾かす作業や肥料製造用に積んだ薪を集めて積み直してたりしました。大きくば海岸には築港方面から流れて漂着したものが沢山打ち上げられて大勢の手が欲しいとうので1年生の外、2、3年生の生徒が応援に行きました。流れ寄ったもので印のある物は持ち主が判りますが、何の印もなく誰の所有か判らないものが大部分です。

午前中で大部分の片づけが終わり、学校長は被害者家庭の慰問に廻り、他は学校へ引き上げました。そして更に生徒の被害状況を聞き、諸注意をして全員放課としました。

午後に職員全員で被害の実態の確認と被害者家庭への慰問に出かけました。調査の結果は次のとおりで学区内には死者行方不明は1名もないし、負傷者も出な



津波の前兆で潮が引いた岸壁

かったことは不幸中の幸いと申さねばなりません。

ただ「衣類を汚したので2、3日登校させられないかもしれないから」と申出た父母がいましたが、翌日から欠席する者もなく出校してくれました。

学用品のうち教科書を流したものはなく皆鞆に入れて持ち出しましたが、その他の学用品のうち若干流失した者もありました。

学校では、直ちに被害状況を教育委員会に報告し指示を仰ぎ、更に調査洩れの者がいないか確かめました。

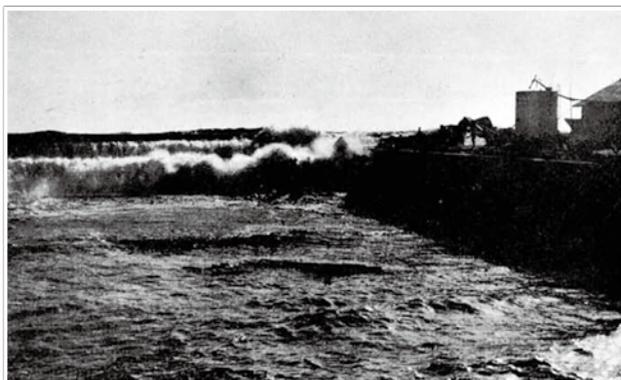
P T Aでは役員会を開き被害生徒の家庭に慰問を行うことを協議し、会長、副会長、校長が被害家庭を訪問して金壺封と学用品若干を贈呈しました。

中学校の生徒会は被害生徒のため義損金を贈ることにして、それぞれの学級のホームルームが活動してこれをまとめ、生徒会長、副会長及び教師代表者が家庭を訪問して贈呈しました。

こうしてみんなで励まし合い、慰め合って翌日から学習に支障がないように配慮してきています。

## 体験談その2 小学校4年生（被災時）

夜中にサイレンが、ポーポーと鳴りました。そのうちに外の方で「津波だ」という声が聞えました。そこで僕は、急いで起きて海に見える丘の上に行ってみたら、もう大勢の人が集まっていました。海の方を見ると、のりしばの所まで、潮がずっと引けていました。僕はそれを見て、ぞっとしました。下の方から、「逃げろーっ」という叫び声が聞こえました。沖の方を見ていたら浪がどんどん押し寄せてきました。見る見るうちに、安渡中に水が回ってまわってしまいました。僕のそばにいた年寄のおばあさんは、「なんまいだ、なんまいだ」と云ってました。見ていた人たちの話では、波が押し寄せる時よりも、帰るときがこわいと云ってました。帰りの波にのって、船や材木などがおし流されてきました。2回目の波は少し弱かったが、それでも友人の家の50メートルぐらい前まで押し寄せてきました。



津波の瞬間

またどんどん潮が引けていったかと思うと、こんどは一番大きな波が押し寄せてきました。1回目や2回目よりも勢いよく来たので、波のまわり方が早いようでした。見ると、道路の上を、樽や色々なごみが流されて浮かんでいました。ぼくのそばにいた人は、「今度は大きいぞ、大きいぞ。」と言っていました。堤防の近くにいた泥を上げる船は、その波に押し倒されたり、反対におこされたりして、とうとうめっちゃめちゃに壊されてしまいました。帰りの波に乗って、屋根だけ見える家や、大きい材木や、船がたくさん、いきおいよく流されいきました。津波がやんでから、下の方に行ってみると、どこの家を見ても、窓やガラスが壊され、家の中には、たたみの上に泥やごみが上がっていました。また、家が曲がったり流されたりした所もありました。

津波にあった人たちは、畳を洗ったり、汚れた着物や布団を洗濯したりして、みんなまっ黒になって、忙しそうに働いていました。役場の人たちは、ガンマーで汚れた所を消毒していました。電気会社の人たちは、切れた電線をつないでいました。消防の人たちは、色々邪魔な物を片付けていました。ぼくの家の人たちは、親類の家に行って、色々な仕事を手伝っていました。ぼくの家は、丘の上に立っているのです、こんな時はいいなあと思いました。

### 体験談その3 小学校4年生（被災時）

「津波だ津波だ」と言う近所の人達のさわぎに私ははっと目をさました。水はもう道路の上までもきていました。荷物をくばっている人、潮の引き方を見ている人達の心配そうな顔、私は本当に津波が来るだろうか、潮のくるいかもしれないと思いました。「おかあさん、どこの家でも荷物をくばっているよ、私の家でもくばったら」と言うとおかあさんは、地震のない津波なんてくるはずがないと言って辺りの様子だけ聞いていました。



津波に襲われた家屋

1回目の水が引いてから1時間ぐらい経つたろうか、「水が来たよう、早く逃げて」と叫ぶ声がありました。私は驚いて飛び出すと水が家の中へのこのこと入ってきました。まるで大きな生物が、ノッスノッスとはいつてきたようでした。茶色みtainな水の色、「かあさん早く、早く」と叫んでいる隣の家の声もすれば、「ぼくのものを持ってきてよ」と叫んでいる声もしました。私はかばんを背負って水のこない所に逃げました。そこから見てみると、ガラスが「ガチャン」と壊れる音や家のメリメリと壊れるものすごい音がして水と一緒に流されて行きます。樽、壺、鍋、たらい、そのほか色々なものがゴーゴーと音をたて流れていきます。家のまわりをみる10隻位、船が流されて来て囲み、ドカンとぶつかるとメリメリと家の柱などが壊れたりしました。「私の家が流されていく」とすすり泣きや、神様にお祈りしているような顔しか見えません。頭の中は津波のさわぎでいっぱいです。私には近くの人顔さえかすんで見えないくらいでした。

水が引けてからもう朝になりました。私たちは、高台で3時間を過ごしたのでした。6時の時計が打つてから岩手放送をかけるとこの津波はチリで大きな地震が起き、それが24時間で岩手県、北海道などに来たとのことでした。後片付けをしようと思って家に入ると、壺は浮き上がり、その上にラジオ、タンスなどが横倒しになって重なり、私達の着物や服や本などは泥にくるまり、あっちに1つ、こっちに1つというように投げ出されていて、泥がいっぱいにたまり、泥くさくて本当にいやな感じがしました。後片付けをするのに2週間ぐらいかかりました。

津波のときの出来事は、いつまでも忘れないでしょう。津波は恐ろしい、一度に何十人、何百人という人の命を奪い多くの財産を流してしまう、このような津波は二度と来なければよいがと思います。今では後片づけも終わり、元どおりの家になったのです。でも家まで流された人達はどんなに困っているでしょう。橋や鉄揺、そのほかのものも新しく作りなおさなければならぬでしょう。私たちは、全国のお友達に励まされ、学用品やたくさんの衣服をいただきました。この感激をいつまでも忘れないで一生懸命勉強し、御恩返しをしたいと思っています。

### 体験談その4 中学校3年生（被災時）

私は、4ヶ月前のあの津波の朝の事を思い出して、南米チリ沖からきた津波が太平洋をこえてよくもこの日本の三陸まで来たものだとしみじみ痛感させられます。朝まだ皆が寝ている時に、近所の人に「津波だから起きろ」と戸をうるさく叩き起され、外を見ると海の水は、魚市場の岸壁をあらわに見せる位の水の引けかたでした。これは大変だと思い、何が何でも荷を背負って逃げまし

た。いくら5月とは言え夜明けの朝の空気はとても冷たく、じっとして居る事が出来ず、それにも増して津波だと言う気持ちがいっぱいで、ひとりでに足がガタガタ震えてどうする事も出来ませんでした。その呆然としている時に、「本当に津波なんて来るんだろうか。」又「昭和8年の津波の時の様子はどうだったろうか。」と疑問に思いました。私達はそれにもまして、ずうっと以前から吉里々々に住んで居たのでもないのに、昭和8年の津波について全く何も知りませんしその本当の恐ろしさと言うものを知らないのです。そんな事を考えながら黙って海を見ていると、吉里々々津波を経験した人達は、恐しさのあまり、男も女も山のすみの方でシクシクと泣いているようでした。

それから大体30分位したのでしょいか、海の波がうねり出して海岸におしよせて来ました。こんなことを見たことのない私としても家の方に来た時は「あっあっ」と大声を出しました。もう付近に積み重ねておいた材木が家にぶつかったり、便所がひっくり返ったり、造船所の古い大船が流されて動き出したり、あちこちの家がミチミチと揺れて傾いたりし始めたのです。そして突然海は泥海となり、木やごみやいろいろ流れていくのを、私達は又他の人達も見て居て「あア」と気を落してしまいました。異様な声をあげて、我も我もと家に向けもどったのです。

一波すんだ後の私の家は回りに置いたものは全部波にさらわれ、自転車もあつたはずのがなく、家の中の物までさっぱりでした。特に私の家は、船の電気屋なので、商売道具は大損害でした。家の人達はすっかり気が抜けてしまったようになり、これからどのように立ち直って行ったら良くなるんだろうと思ひ悲しくなりました。私は中学校も今年だけなので、一生懸命頑張り進学しようと思って来たのを、この津波でさっぱりぶち壊された気がして、これからの自分について悲しくなりました。

然し又新開を見たら吉里々々等よりもひどく、やられたところがあり、宮城県の志津川町等は何人となんか人の死んだ事もわかり、私達よりも苦しい人もあるんだと云う事を知り勇気がわいて来ました。それで今日まで頑張って来ました。然し以前までは希望に燃えて張り切っていましたが、つい最近までは前のようなしっかりした気持をとりもどせず生活していました。以前の様に明るい安心した生活が出来る様に、自分自身にもむち打って途中でたおれおちない様に家の人達と共にやって行きたいと思ひます。



津波に襲われた家屋



突然押し寄せた津波、日本で142人犠牲